

【随 筆】

春 近 し

住 吉 尚

(釧路支部)

季節はもう3月。桃の節句と言っても北海道はまだまだ雪の日も多いですね。でも、「もう春が近いかな」と、思わせる日差しになりましたね。2月14日日曜日に、タンチョウカウント調査時には見つからなかったタンチョウの親子を見に出かけてみました。場所はバラサン沼の近くですから、尾岱沼と走古丹を回って来ました。飛雁川河口部ではチカ釣りでしょうか、釣り人が多数見えました。この冬の走古丹ではシカの数思ったほど多くはありませんでした。捕獲ワナが機能しているのでしょうか。そして別海市街に向かう途中です。タンチョウの親子はやはり私が思っていた通りの場所にいたので、ほっとして帰って来ました。さて翌日の月曜日は夕方から大荒れになると言うことですが、この先1週間でこの日以外に用事がない日がないので、ワカサギ釣りに出かけてみました。どうせ私の釣りは午前中だけです。天気が悪くなる前に帰ってくる事ができるでしょう。こうして9時過ぎでしょうか、釣り場に到着です。さすがにこの日は釣り人の数が少なく、14~15人と言う所でしょうか。しかも私が釣り場に着いた頃にはもう帰り支度をし始めている人がいて、私は彼らの開けた穴を使うことにしました。気温が高くあまり寒くないので、テントは張ったものの、大方は外での釣りとなりました。釣果はさっぱりでしたが、昼まで楽しくやって帰りました。でも私が帰る頃にはほとんどの釣り人は帰っていて、私のあとに残ったのはほんの数人だけでした。天気予報を気にしながらの釣りでしたが、道東で発達する低気圧は強風を伴いますから要注意ですね。さてこの日は道路脇にシカが多く、注意しながらの走行でした。特に別保から深山へ上がる坂の途中の大きな法面にはたくさんのシカがいて、法面に生えている芝草を食べていました。この時期になるとササなどの山に生えている草の葉はほぼ食べつくしてしまっている上、雪が固くなりますから、雪を掘っての採食は大変なのでしょう。それでシカたちは道路脇に出てきて、早く溶けた道路法面の芝草を食べるのです。やはり枯草でも芝草は山の堅い草や木の枝より柔らかく美味しいのでしょう。昆布森



雪が少ない所はシカだらけ

分岐を越すとシカ柵がありますが、このシカ柵を越えて道路側で芝草を食べようとしているのでしょう、シカ柵の外側にはたくさんのシカがいました。ただシカ柵の向こう側だけではなく、道路側にもシカがいますから要注意です。何かの拍子にシカ柵を超えたものの、群れは柵の向こう側、と言うことで何とか越えられないものかとシカ柵にアタックしているものがいれば、道路法面の芝草を食べようとシカ柵を越えようとしているシカもいて、彼らも大変なのでしょうね。

2月16日火曜日は雨は上がったものの風が強く、大変な天気でした。我が家も屋根の雪を気にしたりでしたが、大変な悪路になっているとの情報があり、1日家でじっとしていました。翌週の日曜日21日は、1月の末の標茶町でのタンチョウカウント調査の時に、駅からあまり遠くないところで「クロヅルを見た!」と聞いたことを思い出しました。今日は特別やらねばならないこともないので、「そうだ、クロヅルを見に行こう!」と思い立ち、出かけてみました。そこは大きな農場の中ですから、まずは道路を走りながら眺めてみましたが、牛舎などの建物が多く、タンチョウがあちこちに見えるものの、クロヅルがいそうな気配がありませんでした。それではと、釧路川の築堤上を走って裏から見ると、タンチョウがいるわ、いるわで、40~50羽はいたでしょうか。見てみると牛舎から5羽も6羽もぞろぞろと出てきたり、また1羽2羽と入って行ったりしていました。牛を管理している方から見ると、衛生上の問題もあり、悩ましい状態なのでしょうね。タンチョウはたくさん見ましたが、黒いツルは見えません。仕方なく、数km離れたツルが集まりそうなところを見て歩きましたが、あの農場以外にはタンチョウがたくさん集まっているところはなく、戻って再び道路上から観察しましたが、収穫なし。もう一度だけ道路上から眺めて終わりにしようと思いました。がやはり見えず。仕方なく諦めることにし、Uターンし



クロヅル

て帰ろうとしていた時でした。右目の視野の右端に黒いツルの姿が！ん～！いたか！幻か！再度Uターンして良く良く眺めていると、サイレージの山でしょうか、1山目と2山目の間に探していたそのツルがいました。タンチョウの群れの中にいると、墨黒いこのツルは良く目立ちます。以前見た人からはタンチョウにいじめられていたよ！と聞いていましたが、目の前にいるクロヅルはタンチョウの中でも堂々としていて、体格は少し小さいのですが、それを感じさせない雰囲気がありました。これはこのクロヅルが雄で、しかもそろそろ発情期だからでしょう。頭の赤いところも大きく、いかにも「私は男だ！」と言っているようです。この時は良く判りませんでしたが、たぶん気に入った雌がそばにいたのでしょう。このクロヅルが道東に来てからもう3年近くになるので、すっかりこの状況になじんでいる様子が見て取れました。ただこれから気に入った雌との間に子が生まれると、雑種をどう扱うのか？と頭の痛い問題が起きそうですね。ツルの仲間は飼育下では雑種ができやすいという特徴があり、クロ・タンとかタン・クロとか言う鳥が道東を飛び回るのはどうなのでしょう？私的には止めてほしいものだ！と言うのが正直な気持ちです。クロヅルと言うのは現在世界で最も数が多く、分布も広いツルでユーラシア全体にいます。ユーラシアの西側にいるグループは冬には地中海沿岸からアフリカへ行き、東側のグループは中国南部などで過ごします。このクロヅルはナベヅルとの雑種が自然界でも見られ、釧路の動物園で最初に飼育したクロヅルも雑種のナベ・クロでした。野生の鳥だから、自然に任せると言うのもひとつの解決法でしょうが、タンチョウに雑種ができるのをただ見ているのも、どうなのでしょう？

今冬最後のワカサギ釣りは3月1日でした。3月に入るとワカサギはさっぱり釣れなくなります。これは産卵期が近づいたため群れが小さく固まるからでないか？と私

は考えています。そのためでしょうか？釣果はさっぱりでした。3月2日は全道的には大雪だったとか。ここ釧路は雨混じりで雪はあまり多くはなかったものの、車も道路も氷でガチガチツルツルとなりました。景色はまだまだ冬そのもの。それでも雪に雨が混じったりして、少しずつ春が近づいていると言う感じがありますね。タンチョウは子別れの季節ですから、盛んに親が幼鳥を追回しているのが見られます。先日は幼鳥が親鳥の背中に首を載せてスリスリするのが見られました。鳥が体を擦り付けて感情を示すのは大変珍しいことだと思って見ていましたが、これは親が子別れをするよう子を突き放そうとしている時に、子が「未だ一緒にいたい」と甘えかかっていたようでした。そしてもう繁殖期に入ってきているのです。交尾をする様子もあちこちで見られます。

こんなタンチョウを見ながら走っていると、道路脇のヤナギに白い綿毛が出ているものがあつたので写真に撮ってみました。白い綿毛の先端には未だ冬の寒さから芽を守る堅い殻が残っているのが見えます。ヤナギの白い綿毛が出るとヤナギの花が咲いたように見えますが、これは花ではありません。寒さから花芽を守っている防寒服のようなものです。花が咲くのはまだだいぶ先のことです。花が咲くと雄しべの頭が黄色いので、全体が少し黄色味がかって見えると思います。早春の花の受粉を



ヤナギの綿毛

助けるのは主にハエの仲間です。ハエは幼虫の餌になる腐肉などが季節に関係なく出て来るので、これに対応しなければなりません。そのため、幼虫の餌になるものがあればいつでも産卵しようとしします。これは季節にかかわらずに不安定な幼虫の食べ物を利用しようとするハエの戦略なのでしょう。このため、成虫のハエも季節にかかわらずにいつでも発生するということになるねです。こうして餌に親虫が産卵してもすぐ冬がやって来ると死んでしまう幼虫も多いのですが、上手く蛹や成虫に

なっていればそのまま越冬して春には早速繁殖すると言うことになります。こうして春一番の花はハエによって受粉されることが多いのです。こんなことがあるため、植物の方もハエを意識している花が多く、ミズバショウは人には不快な匂いがしますし、クロユリの嫌な匂いもハエを寄せようとしているのでしょう。ヤナギの花には嫌な匂いを感じたことはありませんが、何でハエを寄せているのでしょうか。

ここでもうひとつ注意して欲しいことがあります。先日道路を走っているとタンチョウが道路上で交尾をしているのを見ました。これほどでなくても、この時期になると冬期の給餌場などから繁殖場所へと移動が始まります。子別れ、交尾、繁殖場所の確保など、タンチョウには気になることが多いからでしょうか？あちこちで道路上に出てきて我々から見ると「のんびりと道路上を歩いている！」と言うことが多いので、道路脇にタンチョウを見かけたらぜひ徐行をお願いします。タンチョウは大きな鳥なので意外に動きが遅いものですから。



道路上のタンチョウ

3月9日付け新聞にタンチョウカウント調査の結果の速報値が出ましたので、補足しながら説明をしましょう。道が中心になって1月にカウント調査を行い、この結果が1,478羽と出ていました。私たちが行ったカウント調査の結果、速報値では1,900羽と出ました。これは調査の方法の違いで、道の調査は決められた日の決められた時間に調査員が何羽のタンチョウを見たかを報告してもらい積算したものですから、一桁まで正確な数字が出ています。でも私たちが行っている調査は「今北海道に何羽ぐらいのタンチョウがいるのか？」と言うことを知るための調査です。私たちも何十何羽まで正確に数えたいのですが、簡単ではありません。調査の最終日に私は別海町が調査範囲でした。夏にヒナに足輪を付けたタンチョウがバラサン沼の近くにいるはずでしたが、この日は見つけれませんでした。でも2週間後に行ってみると、その家族は思い通りの場所にいました。親子の家族



中には何羽いるのかな？

ですから、調査時に見なかったタンチョウは3羽と言うことになります。またこの調査の時に「ベラヤ」と言うタンチョウがいるはずだから見てきてくれ！と言われていました。でもこのタンチョウも見つけられませんでした。この「ベラヤ」は国後島で生まれ、ロシアの研究者が足輪と衛星受信用の発信器を付けて放したものです。こちらは定期的に信号を受信していますからどの辺にいるかは判っています。でも私にはその日に発見できませんでした。あとから発信場所を調べると、私は「ベラヤ」から40 mぐらいまで接近していたはずですが、建物の陰とか堆肥山の向こう側とかで私には見えませんでした。このタンチョウはペアですから、これでいたはずのタンチョウでこの日は見えなかったタンチョウが5羽いたことになります。一方で、今年初めてタンチョウが来ている農家を見つけましたが、こちらにはなんと24羽ものタンチョウが集まっていました。たった1日のたったひとりの調査員の報告でもこれですから、何十人もの調査員で、2週間に及ぶ調査ですから一桁どころか十の位でも正確ではないのでは？と。正確を期するよう努力するほどに数の不確かさを感じてしまうと言う矛盾を抱えている調査です。だからと言ってこの調査は無駄ではなく、大変重要な調査です。私が関わってからでも15年は調査結果が積みあがっています。これを全て地図に落として、時間系列を加えると3次元のグラフができるでしょう。これを見るとタンチョウがどんな風に数を増やしてきたかが一目で判ると思います。こんな事を上手くコンピューター処理して保護につなげていける若い研究者が出て来ることを期待しているのですが、日本の大学はお金にならない研究にはさっぱり熱心ではありませんね。ロシアの研究者がヘリコプターに乗って衛星受信用の発信器を付けたと言うのに、日本はロシアより研究に関しては貧乏ですね。地味な研究をこつこつとやり遂げると言う情熱のある研究者はいませんか！